長崎県地学会誌　第１９号（１９７３）

研究発表

長崎県石炭鉱業の現状（昭和48年３月）

一　瀬　　亘（長崎県地学会会長）

まえがき

昨年１１月，本誌第１８号で長崎県炭鉱開発史話を発表した。本県の炭田は，日本の重要な炭田の一つで，その生産量は約１０％前後の出炭をしている。昭和４０年の出炭量は５５６万トン（全国比１１％）で，稼行炭坑は２７坑（全国９９坑）であったが，石炭鉱業の斜陽化に伴ひ減少し現在は４坑である。ここでは現在稼行４坑の概況を述べる。

長崎県の炭田の概況

長崎県の炭田は北部より，佐世保炭田，次いで松島・崎戸炭田及び高島炭田に分けられる。佐世保炭田は薄層であるが，一部では強粘結性の炭質を有し，埋蔵炭量は９億2,７００万トンとされる。松島炭田は主に海底炭田であり，炭層は厚く，埋蔵量１０億3,５００万トンである。高島炭田は，海底炭田で，炭層最も厚く，強粘結性でコークス原料炭として不可欠の優秀炭が多い。埋蔵量６億3,０００万トンである。長崎県の全炭量は約２６億トン（全国比１２％）である。

稼行炭坑

現稼行炭坑は４坑である。

本ケ浦坑

本坑は北松浦郡鹿町町に残る北松唯一の炭坑で，もと日鉄鉱業鹿町坑として稼行されたが，昭和４５年１０月同町栗山炭鉱大平炭坑として栗山社長が名古屋の東邦ガス会社と協力し，資本金1,０００万円で北松粘結会社を設立し本ケ浦坑を再開したものである。月１万トン出炭計画で，４０％を名古屋の東邦ガス，残りの６０％を一般炭として大村発電所，その他に送炭している。炭質は強粘結性で硫黄分がすくなく0.5％以下の優秀炭で，炭量は1,５００万トンで割合に少い。

池島炭坑

本坑は松島炭田で稼行される唯一の炭坑で，西彼杵郡神浦町池島にあり，池島炭坑ＫＫとして最近発足した。炭層が厚く，埋蔵量豊富である。最近機械化が進み，自走枠レンジングドラムカッターを使用し，昭和４４年には出炭能率１０４.８２トン／月／人の新記録を樹立した。当時全国平均４６.９トンである。昭和４２年には自家発電の余熱を利用し，海水蒸溜装置（月2,６５０トン）を日本で始めて設立した。同坑では対岸より水船でトン当り５０円で買っていたが，経営の目途がついたので実行に移した。

高島・端島炭坑

本坑は西彼杵郡高島町にあり，高島炭坑ＫＫが経営している。炭質は高カロリー（8,０００カロリー），低硫黄強粘結性の製鉄のコークス原料炭として不可欠の優秀炭である。

昭和４０年１１月，日本最深の二子立坑を開始した。最近，二子区域の一部を中止し，主力を西

部の端島区域に移した。炭坑としては種々の困難を持っている。即ち深部採掘及び外国炭と競争（濠州産よりトン当り1,０００円以上高価）がそれである。

むすび

日本では現価で自立出来る炭坑は一つもない現状である。今まで閉山した主なる原因は，累積赤字・坑内悪化・高硫黄等で，多くの炭量を残して閉山したが，国は最後は国家管理を実行して残存炭量を採掘すべきであると考える。

参考文献

1. 北松炭田地質　上治寅次郎
2. 松島炭田　長崎造船大学研究報告７号
3. 高島炭田　同　上　８号
4. 長崎県石炭鉱業百年の歩み　同上１０巻２号
5. 長崎県炭鉱開発史話　長崎県地学会誌　18号

書　評

野田光雄著　大学教養　地学

共立出版　１８３頁　７５０円

これから地学を学ぼうとする人や，地質巡検会などで少しでも興味を覚えた人なら，何か参考書を手に入れてさらに勉強しようとするだろう。この場合，入門書として大学の教養課程の地学教科書が手頃であろう。２，３の例をあげれば

奥津・八木：**一般地学**　学術図書　７５０円

市川他５氏：大学教養　**新地学**　学術図書　６００円

小島・長谷・多井：大学一般教育　**地学教科書**　共立出版　６００円

などが基礎知識をつけるのによい。

最新版の**大学教養地学**は，本会名誉会員の野田光雄博士の，永年にわたる九大教養部における講義の体験をもとにして書かれたものである。全般を通じて，本書はきわめて正統派的であるという印象が強い。とくに前半（１～３章）は，かっての藤本治義博士の名著「地質学汎論」の再現といった感じすらする程で，もっとも基本的な重要事項を，新しい学説の汎濫に目をくれないで解説している。

後半の「地球の生い立ち」の部分は，著者の多年にわたる研究成果に基づいた記述がなされている。整合と不整合，層理，対比，化石などの項では，多くの具体例を示しながら述べられているので，地層に興味のある人には参考になることであろう。

なお，著者から直接聞いた所では，本書の定価は，１回の散髪料程度にしたいということで決ったとの裏話をつけ加えておく。

（鎌田泰彦）